

V 総合的なまとめ

調査結果をもとに、子どもの多様な生活実態、学習や生活に関する意識、保護者の教育や子どもに対する期待を明らかにしてきた。また、平成10年度から5年毎に行ってきた過去3回の調査結果と比較することによって、経年の変化を把握し、傾向を探った。それらの結果を総合的にまとめ、以下の4点に整理することとした。

1 子どもの家庭生活について

(1) 生活習慣のようすは？

過去の調査を通して見ると、全体として、早寝・早起きの方に变化しており、朝食については、ほとんどが食べている。夕食については、「家族全員で食べる」と「全員ではないが家族そろって食べる」とを合わせると、小学生で約9割、中学生で約8割である。「家族全員で食べる」ことが増加してきている。子どもの食習慣に対する保護者の意識の高まりと考えられる。

(2) 家庭での過ごし方は？（学習以外のことについて）

学校から帰宅した後は、テレビ等を見て過ごすことが最も多く、音楽鑑賞とともに、携帯電話・インターネット等のコミュニケーション・情報収集に係るものが増えてきている。また、電子ゲームをする割合も増加してきている。スポーツをして過ごすことも多くなり、中学生に増加傾向が見られる。いっぽうで、読書をしたり、散歩や買い物をしたりといったことは減少し、中でも、散歩や買い物をすることは、小学生において減少傾向が著しい。

友だちとは、大人数で遊ぶ傾向にあり、主に小学生では下校後の時間、中学生では休日に遊ぶことが多い。中学生は、放課後は部活動などで過ごすことが多いため、休日に遊ぶことが多くなっていると思われる。

休日は、小学生が親子で過ごし、中学生は部活動で過ごすことが多い。学習塾や習い事などへ行ったり、家で勉強したりすることが増加してきている。

手伝いについては、取り組みやすいことを中心にして、全体的にしているようすをうかがうことができ、小学生では、全体として「よくする」方に变化してきている。

生活習慣においては、全体として価値的に良い方向に向かっていると思われる。朝食を食べていない子の中では、時間がないからという理由が増える傾向にあるが、摂らないで学校に行くと、体調が整わず意欲がでないため、集中力に影響があるので、しっかり摂らせることが必要である。また、朝なかなか起きられないと思う子どもが多いが、睡眠の不足は、体の抵抗力を低下させるだけでなく、精神面や学習面にも影響があるので、時間を十分に確保することが大切である。

引き続き、早寝・早起き・朝ごはん、そして家庭学習の定着という四点を意識して、生活のリズムをつくり、生活習慣を確立し、子どもたちの健やかな成長のために生活環境を整えていくことが大切である。

過ごし方についてはさまざまであるが、学習時間も含めて、時間の使い方を考えながら、1日の中で、また一週間の中でバランスよく過ごさせたい。

家の手伝いについては、家族の中での役割・存在感を自覚し、自信を持ち、自立を促す機会となるので、主体的に行えるよう、行動を認める言葉かけやかかわりが大切である。「自分の考えをしっかりと持って行動する人」になってほしいと保護者は望んでいるが、「自ら進んで行動する」子どもを育てていけるよう、家庭と学校、地域とで歩調を合わせていけるとよいだろう。

2 家庭での教育と親子関係について

(1) 家庭での教育については？

多くの家庭が、「子ども中心の生活を送っている」ことが調査からうかがえる。塾や習い事等にお金をかける割合は増加傾向にあり、中でも中学生の保護者の方が割合は高く、進学への関心の高まりを感じさせる。反対に、しつけや教育について自信があると回答した割合は、2割にも満たない結果であり、子育てに対して自信が持てない様子が見られる。このことが、学校に多くのことを求める傾向につながっているように思われる。

「子どもについて悩みがある」割合は、増加傾向にあり、「学習について」の悩みが最も多く、前回の調査まで減少傾向にあったものが、大きく増加している。次いで、小学生の保護者では「性格や行動について」が、中学生の保護者では「進路について」の悩みが多くなっている。

(2) 子どもと保護者の認識や考え方の違いは？

ほとんどの家庭で、毎日朝食を摂らせるように心掛け、起床、就寝時間を守らせることも高くなるなど、子どもの健康に気を配っていることがうかがえる。友だちとの関係に気を付けている割合も高い。勉強時間を守らせることは増加傾向にあり、家庭学習への意識の高まりを感じるが、「気を付けている」ことの中では割合は低く、3～4割程度である。

いっぽう、注意されることとして、子どもが挙げていることで多いのが、勉強のことであり、増加傾向にある。保護者はそれほど勉強のことについて、子どもに口うるさく話していないつもりでも、子どもとしては、よく言われていることとしてとらえていることがうかがえる。逆に、友だちづきあいについて、保護者としては気にかけていることが多いが、子どもは、それほど重く感じていないようだ。中学生では、友だちづきあいについて注意されると回答した割合は、多くなっている。

(3) 価値観については？

「染髪・ピアス・化粧」をすることについて、保護者は、小学生・中学生の内はしてはいけないが、「大人になってから」「高校生になってから」の順にしてもよいが多い。

「大人になってから」は調査毎に減少し、それとは反対に、増加しているのが「高校生から」であり、してもいいと思う時期がさらに早まる傾向にある。

子どもは、主に「大人になってから」「高校生になってから」が多いが、「小学生・中学生から」してもよいと答える割合が保護者よりも多く、早い時期からしてもよいと考える子どももいる。いっぽう、「してはいけない」については、全体的に多くなっている、保護者よりも子どもの方が割合は高く、特に小学生の意識が最も高くなっている。

「携帯電話やスマートフォンの所持」については、保護者は、「大人になってから」や「持つべきではない」という考え方が著しく減少し、「小学生から」と「中学生から」とが増加している。子どもについても同じような傾向が見られる。保護者の意識に、時代の変化が反映され、早期に所持することを許容する方向に変化している。

（４）家庭での会話のようすは？

ほとんどの子どもも保護者も、「話す」と回答しており、増加傾向である。親子の対話を大切にする傾向がより強くなってきている。会話の内容に注目してみると、子どもでは「学校のできごとを話す」こと、保護者では「学校のこと」「友だちのこと」が多く、気軽に話し合える話題が中心になっているようだ。

いっぽう、「今、一番興味があること」「今、悩んでいること」などのような子どもの内面を知ることはできにくいようでもある。「社会の出来事」や「体や健康」については、減少傾向にある。中学生では、仲の良い友だちに悩みを相談したり、将来のこと・社会のことを話したりすることが増加してきており、内面的なことでは、保護者よりも友だちに話す傾向が強まっていると考えられる。

相互理解の面から見ると、保護者は「自分を理解している」「自分の話を真剣に聞く」と思う子どもが、調査毎に増加する傾向が見られる。家の人を尊敬している割合も増加傾向にあり、小学生の方がその割合は高い。中学生では、「かまってくれる」「きびしくされる」と感じるが増加する傾向にあり、保護者の子どもへの関心や関わりが大きくなってきていることを感じさせる。

子どもたちは、時には厳しさを、時には愛情を感じながら、家の人からの理解を実感しているようだ。

これまでの調査と同様に、ほとんどの家庭で、子どもの健康に気を配りながら、親子の対話を大切に、温かい雰囲気の家をつくることを重視している。日頃から親子の関わりを持ちながら、週末は家庭や家族で過ごし、家族の絆づくりに積極的なことがうかがえる。最も回答の低い項目である、「親の権威を高めること」については、さらに減少している。保護者としての威厳を重視することよりも、温かい雰囲気の家をつくり、柔和な関係の構築に移行してきていると思われる。子どもたちにとって家庭が、安らぎを感じ、安心できる場となることはとても大切である。

相互理解については、親子の会話などで子どもを理解しようと努めてはいるものの、興味があることや悩んでいることなどの子どもの内面を把握することが難しいようである。子どもが「今、悩んでいること」について知っている保護者の割合は、3割程度だが、増加傾向にあるので、これからも子どものことを理解していけるように、対話を深めていくことが大切である。

子どもの内面により迫っていくには、「社会の出来事」や「進路、将来のこと」などを話題にし、子どもの内面に迫るきっかけとするのも一つの方法である。また、学校における教育活動の中でも、「社会の出来事」に関心を持たせて視野を広げたり、キャリア教育の充実を図り、将来の具体的な見通しを持たせたりすることで、家庭と学校が連携して、「自ら考える力」を養うことも大切であろう。

3 子どもの学校生活と保護者の教育に関する考え方について

(1) 学校での学習と先生への要望については？

教科に関する調査では、実技系の人気が高いという特徴が見られる。小学生では、理科好きの割合が大きく増加し、中学生でも、理数系の人気が増してきている。小学生では、「道徳が好き」の割合が大きく増加した。どの教科でも、「好き」の割合は、小学生の方が高いが、過去の調査と比べてみると、中学生において、多くの教科で好意的な割合が上昇してきている。

勉強をおもしろく教えてほしいと望む声は多く、小学生では「一緒に遊んでほしい」、中学生では「先生の体験談を話してほしい」も多くなっている。やめてほしいことでは、「特にない」という回答が最も多かった。これまでの調査を通してみると、してほしいことでもやめてほしいことでも、「特にない」という回答が増加の傾向にある。

(2) 家庭での学習については？

「学校の宿題」が中心であり、中学生では、「学習塾の勉強」「受験勉強」が増えてきた。学習塾については、中学生の通塾が増加傾向にあり、約5割で過去最高となったが、小学生では減少した。子どもの回答では、「成績を上げたい」という理由が最も多く、保護者の回答では、小学生の保護者では、「子どもが希望する」が、中学生の保護者では、「成績を上げたい」が最も多い。中学生の保護者では、「授業について行けないから」「受験に役立つから」も増加傾向にあり、進学に対する意識の高まりがうかがえる。約5割の保護者が、「勉強を見てやれないから」とも回答している。

通塾の理由は多岐にわたるが、保護者が子どもに勉強を教える難しさや、中学生になると、進学を踏まえて家庭での学習に取り組むようになることがうかがえる。また、「家庭教育で重視していること」の回答からは、子どもに対して、家庭での学習を充実させ、目標を持って過ごさせるように働きかける傾向も見られている。

(3) 学校への適応とストレスについては？

子どもの5割程度が、学校へ行きたくないと思うことがあると回答しているが、その割合は減少傾向にある。そう思う理由については、小学生では「体調が悪い」など、明確な理由が多く、中学生では、「行くのがめんどろ」といったように、はっきりしていない理由が多い。成長過程での心の在り様とそれに伴うストレスの増加等が影響していると思われる。

ストレスについて、小学生では、多くの項目で減少傾向が見られるが、中学生では、ほとんど変化は見られないものの、「人や物にあたりたくなる」に減少傾向が見られる。全体的に小学生よりも中学生の方が、また、男子よりも女子の方が、ストレスを感じていると言える。いじめについては、いじめを「受けた」「した」「現場を見た」のいずれの項目にも減少傾向が見られる。特に、中学生では、大きく減少している。

(4) 学校への期待と教育問題に対する考え方は？

「教師の子どもへの理解」や「施設・設備などの教育環境」など、4つの全ての項目で「とても満足・満足」の割合が、今回の調査で最も高くなった。学校教育に対する満足度が向上していることがわかる。最も満足度が低かったのは、中学生の保護者において、「教師間での方針の一致」だった。

学校に期待することの中で、最も高かったのが、「心の豊かさを育てる教育」である。「進学に役立つ学力のつく教育」「礼儀や作法などを身につける教育」については、調査毎に期待が増してきている。

教育問題に関する考え方では、「学力別の指導」「できるだけ長い時間学校でみてもらうこと」に必要性を感じている割合が増加傾向にあり、「学力別の指導」については、中学生の保護者において、より増加傾向が強い。また、「学校における性教育」の必要性を感じている割合も高くなっている。体験学習（自然体験や奉仕活動等）の必要性は、減少傾向にあったが、今回の調査では増加した。いっぽう、「ゆとりのある教育」の必要性は、著しく減少した。

学力や集団生活のルールについては、おもに学校で身に付けるものと考えており、人とのつきあい方・安全・他人を思いやる心についても、「学校で身に付けてほしい」が増加してきており、さまざまなことにおいて学校への期待が増している。

（５）進路に関する考え方の変化は？

「公立学校」への進学希望が増加傾向にあり、約８割となった。進学に際しては、約７割が、「子どもの学力にあった学校」に進ませたいと考えている。また、校則の厳しさや大学進学率よりも、子どもが「自由にのびのびできる」「実生活に役立つ技術や知識を教える」学校を望む声も多い。

進路の指導については、「子どもの学力に応じた指導」「合格の難易度などの詳しい情報の提供」を望む保護者が、調査毎に増加してきている。いっぽう、「希望校の校風や指導方針などの情報の提供」「子どもの話をゆっくり聞くこと」「子どもの希望を尊重した指導」は、減少してきている。

第１次の調査では、７割弱の割合だった「学校に行きたくないと思うこと」の割合は、減少傾向にあり、今回の調査では、５割程度にまで下がり、いじめについても減少してきている。子どもを支える家庭や学校、地域の連携による取り組みの積み重ねが、成果となって表れていると考えられよう。子どもが学校生活を楽しいと思い、学校が心地よい居場所になるよう、引き続き、連携を強くしていくことが大切であろう。

好きな教科に関しては、各教科の特性や、学習指導要領改訂による授業時数の変化が大きく影響していると思われるので、好き・嫌いだけで一概に判断はできないが、多くの教科において好意的な割合が増加したことは、授業改善の表れでもあると考えられる。

教師への要望については、子どもの素直な気持ちの表れとして、子どもたちの想いや願い、期待を受けて教育活動に臨み、期待に応えていくことが大切である。

子どもについての保護者の悩みが増加傾向にあり、家庭での教育の難しさが見られる中、学校への期待が膨らみ、多くのことが学校にかかってきている。家庭と学校とが子どもの成長を共に支えていることが、子どもにとって重要であるので、それぞれの役割を活かし、連携を図りながら教育を共に進めていくことが大切である。

子どもたちの「生きる力」を育むためにも、これからも学校・家庭・地域が一つになって、学びづくり運動を推進し、確かな学力の向上、家庭学習の充実を図っていくことが必要である。

4 子どもと携帯電話・スマートフォンについて

(1) 子どもと携帯電話・スマートフォンの実態は？

子どもの携帯電話・スマートフォンの所持率は、小学生4年生以上で5割以上、中学生では8割以上と高くなり、生活の一部になってきていることがうかがえる。子ども、保護者ともに、早期に所持することへの抵抗感が薄れ、低年齢化が進んでいる。

家庭でのルールについては、中学生の保護者では、「個人情報を与えない」「ネットマナーを守る」「利用時間を制限する」ことが増加してきているが、小学生の保護者では、半数以上の項目で減少していた。

(2) 携帯電話・スマートフォンによる子どもの生活への影響は？

昨今、携帯電話やスマートフォン、ゲームなどの情報通信機器の普及が急速に進み、小学生、中学生ともに、「パソコンを使う」「携帯電話等を使う」割合が激増し、利用時間が増大してきている。それに伴って、子どもの生活スタイルや人間関係も変化し、学習や読書、睡眠に費やす時間が減少したり、コミュニケーションが不足して、関係が希薄化したりするなどといったことも見られている。全体として、早寝・早起きになっている中で、携帯電話・スマートフォンの利用時間が長いほど、起床・就寝時間が遅くなる傾向も見られている。

とても便利になってきたいっぽうで、子どもたちの生活に影響を及ぼしているなど、その弊害も感じられる。

社会では、ネットいじめや犯罪に巻き込まれるトラブルが後を絶たないなど、携帯電話等によるトラブルが急増している。さまざまな影響を受けやすい子どもたちのためにも、大人として「情報モラル」について知っておくことは必要である。

フィルタリングサービスについて知っている保護者が増加し、利用している割合も8割程度になってきたが、子どもも保護者も携帯電話・スマートフォンの利用上の問題点や望ましい利用方法についてさらに理解を深め、正しい知識と技能を身につけておくことが必要である。利用に際しては、家庭において、子どもと話し合いながら、成長に合わせたルールを決め、機能やサービスを利用することが大切である。

携帯電話・スマートフォンの利用が低年齢化してきた今、学校では、情報教育における「情報社会に参画する態度」の育成の面からも、「情報モラル」について、子どもが身に付けられるよう、小学校段階から系統的に指導していくことが求められている。

情報化社会の現代において、携帯電話・スマートフォンが子どもたちの生活の中に入り込んできた今、メディアとの適切な関わり方についても、学校、家庭、地域が連携して取り組んでいく必要がある。